

いの健ニュース 第38号

URL : <http://inoken-miyagi.jimbo.com/> E-Mail : inoken.miyagi@gmail.com

仙台市青葉区五橋 1-5-13 宮城県労連気付 (TEL 022-268-3684)

故大泉博史先生の公務災害認定を勝ち取る

大泉事案の概要

「部活動」などによる過重労働と「生徒の指導上の悩みなど」の精神的疲労が死に追い込む

2006年4月に赴任した登米市立中田中学校で、2008年2月7日の1校時目の授業中に突然乱入してきた他のクラスの生徒を指導するために、廊下に出て指導をした直後に、校舎から飛び降りて自ら命を絶ちました。

大泉さんは、2006年に登米市立中田中に赴任後2年連続で3学年担任とソフトテニス部の顧問などで、長時間労働を強いられ、さらに、被災者の給食に睡眠薬が混入される事件や黒板に「死ね」との落書きがあったりした事件があり、生徒の指導上の悩みを抱えていましたが、校長や教職員同士のサポートもなく、2007年8月頃から、「眠れない」「学校に行くのが辛い」などと家族に訴えていたが、病院に行く暇もないと診察も受けずに勤務し続けました。

3学年担任としての進学関係事務が一段落した1月末頃から、個人のパソコン上に「2年続けての3年生の英語の授業はなかなか成果を発揮することができず苦しかった。何をどうすればいいのかわからなくなり、気力さえ失ってしまいました」「自信を持って仕事をしてきたことのすべてを失ってしまいました」との苦しみ抜いた心情を書き残していました。

妻の淳子さんは、2年後の09年12月に、夫、博史さんの死は、連日の長時間労働、休日労働による過労と指導上の悩みに対する職場のサポート不足による「過労自殺」の公務災害だとして地方公務員災害補償基金宮城県支部に公務災害請求をしました。

支部審査会の決定の特徴

基金支部の「公務外」と却下

2012年2月13日、基金支部は「異常な出来事・突発的事態」「肉体的過労等を発生させる可能性のある事実」「精神的ストレス等を発生させる可能性のある事実」のいずれも確認できないとして「公務外」として、請求を却下しました。

この裁決は、生徒指導上の問題についての事実を過小評価したり、労働時間につい

て記録がないことを理由に過重労働がなかったとして、学校の教職員の労働実態を全く見ない不当なものでした。

基金支部決定を不服として審査請求

2012年4月5日、2月13日の基金支部の「公務外」とする決定に不服であるとして、基金支部審査会に対して審査請求をしました。

審査請求理由は、下記の通りです。

(1)「異常な出来事・突発的事態」について、「被災職員の給食への睡眠薬混入事件」「被災職員に対して、教室の黒板に「死ね」という落書き」「被災職員の授業に対する教室乱入による授業妨害」などは、一つ一つばらばらに評価して、中学校にあってはその程度の出来事は特別に過重なストレスを感じるような出来事ではないとして、層層的に重なるストレスを総合的に評価をすることを避けて、「過重性」はないと評価していることは不当である。総合的に評価をすべきだ。

(2)「被災職員の労働時間を確認できる書類がない」「スポーツ少年団の活動の指導に従事している時間を、スポーツ少年団は教諭の業務と認めないとして」として、月100時間以上を超えるような過重労働を認めていない。時間外手当の支給要件のない教諭については、勤務の始業時間と終業時間を記録することが使用者（校長）に義務づけられているにもかかわらず、そのことをしていなかったのは使用者であり、使用者側の書類がなければ被災職員の請求人が客観的事実を記述した労働時間を採用すべきだ。また、当時の勤務校においては、部活動とスポーツ少年団の違いが曖昧で、事実上部活動の生徒が全員スポーツ少年団に組織されており、活動も切れ目がなく行われており部活動と一体化していると認めて労働時間を評価をすべきだ。

(3)着任後、2年続いて中学3学年の担任をすることの精神的ストレスの過重性について、中学校にあっては、校内事情により時々あることとして全く評価をしていないので、進路指導に対する担任と保護者・子どもとの関係における精神的ストレスを正當に評価をすべきだ。

(4)以上の(1)(2)(3)を総合的に評価して、過重性を認定すべきだ。

地方公務員災害補償基金宮城県支部審査会の検討結果

(1)「異常な出来事・突発的事態」について、「被災職員の給食への睡眠薬混入事件」「被災職員に対して、教室の黒板に「死ね」という落書き」「被災職員の授業に対する教室乱入による授業妨害」などについて、総合的に評価して「強度の精神的または肉体的負荷を与える業務」と認定。

(2)「スポーツ少年団の活動に従事した時間も、部活動と一体化していた」と認めて、労働時間として評価した。また、自宅での執務についても、教員の特殊性を認め、労働時間の記録した書類がなくても、全国や宮城県での文科省・教育委員会が調査した時間は信用できるとして、「自宅での労働時間」についても評価した。その結果、被災日の前6か月間で月平均100時間以上の時間外労働をしているものと認定。

(3)被災職員の、2年連続の中学3学年担任や週当たり授業時数23時間、校務分掌

の多さなどについて、総合的に評価した。

(4) 上記(1)(2)(3)を総合的に評価して、被災職員は、「人の生命に関わる事故への遭遇その他強度の精神的または肉体的負荷を与える事象を伴う業務に従事したため生じた精神または行動の障害並びにこれに付随する疾病」であるうつ病を発症し、被災職員の自殺は、これと相互因果関係のある公務に起因するものと認められるとして、公務に起因した自殺と認めるべきであると、「公務上の災害」と認定した。

このように、請求人（被災職員の配偶者）の主張が全面的に評価され、「公務外」とした原裁判を取り消す裁判が下った。

故大泉博史先生の公務災害認定勝利報告集会 子どもの成長を担う教職員が死と隣り合わせでいいのか？

7月6日に地元登米市で、「故大泉博史先生の公務災害認定を実現する会総会・勝利報告集会」に開催され、70名が参加して開催されました。

妻の淳子さんはあいさつで、「夫の突然の死を受け入れることができず途方に暮れた日々が続きましたが、友人が「それは公務災害だと思うよ」と教職員組合を紹介してくれて、それ以降、弁護士さんや精神科医さん、多くの支援して下さる皆様に支えられて闘い続けて来れました。夫の遺影の前で、「無念だったでしょうけど、あなたが死をもって訴えたかったことが認められました」と報告しました。子どもたちには、「あなたのお父さんは、教師として誠実に生きてがんばってきたことが認められたのよ」と話をして、やっとこの日を迎えることができ、肩から重荷が下りた気持ちでほっとしました。これからは、二度と夫のように働いて命を失うことのない、私のように苦しむ家族が出ないよう、「過労死・過労自殺」のない社会にするよう微力ながらがんばっていきます。」とあいさつされました。



総会では、開会に先立ち、故大泉博史さんと事務局次長だった故猪股聡さんの冥福を祈って黙祷を献げました。代表の佐々木元宮教組委員長からのあいさつ、堀籠事務局長からの経過報告、決算、会の解散を提案して承認されました。



認定を勝ち取ったポイントについては、弁護団を代表して小関弁護士より詳細に報告されました。内容は、前項の「支部審査会の決定の特徴」に詳細に記載してありますのでここでは省略します。

勝利報告集会は、弁護団の杉山弁護士の乾杯で始まり、高橋宮教組委員長は、大泉さんを最後に学校現場から過労死・自殺をなくしたいと県教委や地教委に防止対策を申し入れていると、さらに、PTA、中体連、地教委などの連名で「土日の部活動は1日は休みましょう」のポスターを作成し、

全職場に張り出していることが報告されました。昨年、各学校の警備会社の施錠、解錠のデータの開示請求をして驚いた結果が出た、平均して6:00解錠、21:00施錠、最悪は、4:30解錠、25:00施錠という学校もありました。精神的な問題で重要な陳述書を書いて下さった精神科医の笠原医師



から、前段で紹介した遺書の内容が紹介され参加者が涙を浮かべながら聞き入っていました。富樫前いの健事務局長からは、宮城での過労死・過労自殺の公災（労災）のたたかいの歴史に触れて、今回の勝利がさらに前進した内容であるとの評価がされました。

そのほかにも、恩師や友人、教え子もかけつけて、大泉博史さんの思い出や人となり語られました。

